

明治期における近代哲学用語の成立：哲学辞典類による検証

著者	朱 京偉
雑誌名	日本語科学
巻	12
ページ	96-127
発行年	2002-10
URL	http://doi.org/10.15084/00002093

明治期における近代哲学用語の成立

—哲学辞典類による検証—

朱 京 偉

(北京外国語大学)

キーワード

語彙史, 学術用語, 哲学用語, 哲学辞典

要 旨

本稿では、語彙史の視点から近代哲学用語の成立を考察するにあたって、明治以後の哲学辞典8種を選定し、基本的な哲学用語を抽出して検討を加えた。

方法としては、西周の訳語と『哲学字彙』初版の用語が、明治前期においてどんな役割を果たしていたか、また、その後の哲学用語にどんな影響を与えたかを解明するために、検討の対象となる881語を「西周と『字彙』初版の用語」と「西周と『字彙』以外の用語」の二部類にふりわけ、その下でさらに10項目の下位分類を設けた。そして、この下位分類によってグループ分けした各種の語について、所属語のリストを掲げ、それぞれの性質を検討してみた。

結論から言えば、「西周と『字彙』初版の用語」は、近代哲学用語の草創期にあたる明治前期に早く登場し、明治全期にわたって強い影響を持っていた。これに対して、「西周と『字彙』以外の用語」は、明治後期から急増し、明治末期に増加のピークに達して、大正期以後しだいに減少していくというプロセスを経ている。大正後期になると、哲学用語の創出は終焉期を迎えたといえる。また、抽出した哲学用語では、在来語と新造語の比率は大体4対6の割合になっていることも今度の調査で明らかになった。

日本流の東洋哲学は、古代から中国哲学の影響を受けて発達した歴史が長い。小論でとりあげる哲学用語は、伝統的な東洋哲学のものではなく、明治期以後西洋から移入された近代哲学の用語をさす。この面での研究は、戦前において、哲学用語にとくに関心を示した哲学史上の大家井上哲次郎や清野勉らがこれに関する論評を若干残しているのを除けば、参考になる資料が少ないようである¹。戦後では、言語学・語彙史の視点から哲学用語の問題を最初にとりあげたのは、栗原紀子の論文「訳語の研究—西周を中心に—」(1966)であった。この論文は、広範囲に及ぶ西周の用語調査に基づき、英華・英和辞典類との照合によって西周の主な造語を特定し成果をあげた。のちに、森岡健二はその著書(1969)に栗原の論文を収めるとともに、自らも「西周訳『利学』」を書き加え、西周訳語の出自を追究した。

また、西周の用語研究とは別に、永嶋大典(1970)の第5章では、英和辞書の発達史という視点から『哲学字彙』がとりあげられた。これにつづき、飛田良文(1979, 1980)は『哲学字彙訳語総索引』を完成させるとともに、『哲学字彙』についての論考を発表した。

このように、西周の訳語研究と『哲学字彙』の訳語研究という二つの分野が切り開かれた。その後、例えば、佐藤亨(1992)、手島邦夫(1998ab, 1999, 2000)の諸論文では西周の訳語について、また、朱京偉(1997, 2001b)、陳力衛(2001)、真田治子(2001)の諸論文では『哲学字彙』の各版についてとりあげ、この二つの分野における研究は今日でもなお展開されつつある。

しかし、西周の訳語と『哲学字彙』初版の訳語は、明治初期において近代哲学用語の基盤作りに大いに貢献したに相違ないが、この二つの分野の研究にとどまっていれば、現行の哲学用語の沿革を全面的にとらえたとは言いがたい。小論では、西周の訳語と『哲学字彙』初版の訳語がその後の哲学用語にどのような影響を与えたか、明治初期以後どのような哲学用語が新たに創出されたかなどの問題を解明すべく、明治・大正期の哲学辞典の用語調査を通して、近代哲学用語の成立過程を概観してみたいと考えている。

1. 哲学用語研究資料としての哲学辞典

1.1. 三種類の資料

哲学用語の成立に多少関わる出版物であれば、いずれも哲学用語の研究資料として検討して見る必要があるが、ここでは、さしあたって、哲学用語と最も直接な関係を持つ哲学専門分野の出版物に限って調査することにした。出版物の形態や内容の違いから、次の3種類に分けることができる。

(1) 単行本の著訳書

哲学に関する知識を体系的に取り上げるのが特徴で、哲学用語の成立過程を考えるときの最も基本となる資料群として位置付けられる。初期の西周の著述をはじめ、刊行年順にそって網羅的に調査するのが理想的であるが、しかし例えば、『国立国会図書館所蔵明治期刊行図書目録』第1巻で調べると、「哲学」の部には、233タイトル、「論理学」の部には107タイトルの著書がリストアップされており、全数調査するには力の限度がある。一方、著書リストには、同じ内容を持つ増刷・再版や、数十ページの薄い小冊子などのような、資料的価値の低いものも含まれているので、まずは、明治哲学発達史における各文献の位置付けを確認したうえで、対象とする文献の抽出作業を行なう必要がある。

(2) 哲学専門雑誌

明治以後に創刊された哲学雑誌は何種類かあるが、中でも明治20年(1887)に創刊された『哲学雑誌』(創刊時『哲学会雑誌』)は、歴史が最も古く、哲学界において中心的な役割を果たしつづけていた。この雑誌は掲載内容から見て、大体三つの部分からなっている²。

論説：単行本の哲学書よりも専門性の強い研究論文、代表的な哲学者の論文発表がとくに注目される。

批評紹介：研究の動向や話題、研究成果についての論評・書評など。

雑録：哲学界をめぐるニュース記事など。

このうち、とりわけ明治20年代に書かれた論説(論文)の類は、時期が早いだけに単行本の補足資料としての価値を有していると思われる。

(3) 哲学（用語）辞典

哲学用語を集めて概観するには一番速い方法である。出版年次順に複数の辞典を調べることに
よって、哲学用語成立の流れをいちおう把握できるのは最大のメリットといえる。小論の目的は
まさにこの点にある。ただし、複数の辞典を対象資料として調査する場合、各辞典の収録語の性
質（既存語と新出語）を確認するとともに、哲学辞典類と単行本資料の相互関係を明らかにし、
明治哲学史における各資料の位置付けに留意すべきである。

1.2. 哲学辞典類と単行本資料の相互関係

哲学辞典は、単行本の哲学著書に比べ、出現の時期がやや遅れていること、それに単行本に使用
された哲学用語を踏まえて編集されるものが多いことから見れば、二次的資料の性質を持って
いると思われる。たとえ哲学辞典類に一步先に現れた用語でも、必ずしも哲学辞典で創出された
とは限らず、先行する哲学書や論理学書などで、より早い用例の有無を確認してから結論を出す
手順を踏むべきである。そのため、哲学辞典の選定に先立って、まず、明治期における哲学書・

表1 明治期における哲学書・論理学書と哲学辞典の相互関係

	哲学書	論理学書	哲学辞典
M 1 M 9	西周『知説』(M 7)	西周『百学連環』(M 3) 『致知啓蒙』(M 7)	
M 10 M 19	西周『心理学』(M 11) 井上哲次郎『西洋哲学講義』(M 16) 和田滝次郎『哲学通鑑』(M 17) 有賀長雄『近世哲学』(M 17-18) 中江兆民『理学沿革史』(M 18) 中江兆民『理学鉤玄』(M 19)	鈴木唯一『思想之法』(M 12) 尾崎行雄『演繹推理学』(M 15) 菊地大麓『論理説略』(M 15) 添田寿一『論理新編』(M 16) 戸田欽堂『論理学』(M 19) 平沼淑郎『論理学』(M 19)	『哲学字彙』初版(M 14) 『哲学字彙』再版(M 17) 普及舎『教育・心理・論理術語 詳解』(M 18)
M 20 M 35	井上円了『哲学一夕話』(M 20) 『哲学要領』(M 20) 三宅雪嶺『哲学涓滴』(M 22) 金子馬治『哲学綱要』(M 28) 清野勉『韓図純理批判解説』(M 29) 中島力造『認識論』(M 31) 松本文三郎『認識論提要』(M 32) 桑木敬翼『哲学概論』(M 33) 朝永三十郎『哲学綱要』(M 35)	三宅雪嶺『論理学』(M 22) 清沢満之『論理学試稿』(M 22) 清野勉『帰納演繹論理学』(M 25) 大西祝『論理学』(M 26) 高山樗牛『論理学』(M 31) 中島力造『論理学講義』(M 34) 桑木敬翼『論理学綱要』(M 35)	(『哲学雑誌』創刊, M 20)
M 36 M 45	淀野耀淳『認識論』(M 40)	紀平正美『最新論理学綱要』(M 40)	朝永『哲学辞典』(M 38) 徳谷『普通術語辞彙』(M 38) 『哲学字彙』三版(M 45) 同文館『哲学大辞書』(M 45)

論理学書と哲学辞典のそれぞれの流れを概観しておきたい。次の表では、一部の主要資料を掲げてこの三者の相互関係を整理してみたが、時期区分は、出版物の展開と哲学用語の成立期に配慮したうへ便宜的に行なったものである。

表1の整理によって、明治期における哲学用語成立の歩みについて次のような認識を得ることができよう。

(1) 明治初期では、哲学・論理学面での啓蒙活動は、主として西周によって行なわれていた。訳語の面においても、手島(2000)によると、西周は中村正直・加藤弘之など同時期の啓蒙家たちを圧して多数の新語を造り出していたことがわかった。西周の訳語は、近代哲学用語の最初の基盤を築きあげたといえる。

(2) 『哲学字彙』初版は、哲学・論理学関係の出版物が現れるごく初期頃に刊行され、しかも英和对訳の形なので、その後の哲学用語の翻訳と形成に大きな影響を与えることになった。とりわけ、西周の訳語を受け継いで後世に伝えたとともに、自らも数多くの新語を造り出した功績が大きい。

(3) 『哲学字彙』初版刊行の明治14年(1881)から明治35年(1902)までの20年余りの間は、哲学用語の大量創出期にあたりと考えているが、単行本資料の豊富さとは対照的に、哲学辞典類のほうでは、明治38年(1905)朝永三十郎の『哲学辞典』が現れるまで、長い間空白の状態が続いていた。なぜ明治38年以後になると、哲学辞典が続々と出版されたかについて考えれば、それは、その時期に哲学用語の体系がほぼ形成されたという状況の現れだとも考えられよう。この推論を哲学辞典類の用語調査によって検証することも本稿の目的の一つである。

1.3. 哲学辞典の選定

近代哲学の知識は明治初期になって始めて西洋から日本に移入されたものなので、それまでに哲学辞典というものは存在しなかった。惣郷正明編『辞書解題辞典』(1977)によって明治以後出版された哲学辞典を調べると、約22種が登録されている。出版時期別に分けると、明治期—5種、大正期—2種、昭和前期(1926～45)—2種、昭和後期(1946～74)—13種となっている。つまり、明治期から終戦までの間に出版されたものが少なく、大半は戦後になって出版されたものである。

ちなみに、主要図書館と文庫などの蔵書目録を使って検索してみたが、惣郷正明(1977)所収のもの以外で、新たに明治・大正期の哲学辞典を見付けることができなかった。また、哲学辞典類のほかに、例えば、『教育辞書』(同文館、明治36年)や『教育大辞典』(大日本百科辞書編輯所、明治41年)のような辞典にも一部の哲学・論理学用語が盛り込まれることもあるが、専門の哲学辞典と比べれば、収録語が限られているので、調査の対象としなかった。

哲学用語の成立時期を問題にする場合、出版時期が早いほど哲学辞典の資料的価値が高いので、この原則に基づいて、表2で示した諸辞典を調査の対象に選んだ。

各哲学辞典の間に空白が入っているところがある。明治18年(1885)から明治38年(1905)までの約20年の空白期については、さきに触れたように、哲学用語の大量創出期にあたるが、哲学用語の体系がまだ形成途中のためか、哲学辞典の編集が見送られているようである。明治45年(1912)

表2 調査対象に選定した哲学辞典

出版年	辞典名・著者・出版社	収録語数	抽出語数
1881 (M14)	『哲学字彙』井上哲次郎他編, 東京大学三学部印行	2437	2437
1885 (M18)	『教育・心理・論理術語詳解』普及舎	490	229
1905 (M38)	『哲学辞典』朝永三十郎著, 宝文館	2442	332
1905 (M38)	『普通術語辞彙』徳谷豊三郎・松尾勇四郎著, 敬文社	1185	460
1912 (M45)	『哲学大辞書』(井上・朝永・桑木・元良・中島) 同文館	6290	563
1922 (T11)	『岩波哲学辞典』宮本和吉他編, 岩波書店	11150	588
1923 (T12)	『最新哲学辞典』渡部政盛著, 大同館	1961	484
1950 (S25)	『哲学用語辞典』高山岩男編, 弘文堂	599	198
1974 (S49)	『哲学用語辞典』村治能就編, 東京堂	450	318

* 表中の各辞典の収録語数は筆者の統計による。抽出語数は異なり語に整理する前の語数である。

から大正11年(1922)までの空白期については、おそらく明治45年に『哲学大辞書』という前例のない大作が出版され、当面需要が満たされたため、同類辞書の出版は約10年の期間を置いて再発売したのではないかと考えている。なお、大正12年(1923)から昭和25年(1950)までの26年間では、『岩波哲学辞典』(1922)の増刷版や増訂版が相次いで世に出たほか、三木清編『現代哲学辞典』も昭和13年(1936)に出版されていた。ただし、この辞典は、一種の広義的な社会科学辞典というべきもので、しかも大項目の編集法を用いているため、哲学用語が充実しているとはいえず、調査対象からはずした。

戦後になると、哲学辞典の種類が増え続けた。しかし、このときになると、哲学用語の体系はすでに定着しているので、昭和期の二辞典は、主として明治期に創出された哲学用語の存続状況をチェックするために取り入れたものである。そのため、収録語が多くの分野にわたるような大型辞典よりも、哲学関係の基本語をきちんと押えた小型辞典のほうが小論の目的に適していると思い、この二種を選んだ。むろん、戦後において、新理論に伴う新語の出現や、術語の漢語離れと片仮名語化など、哲学用語には新しい変化が起きていることも事実である。これらは、当面の課題とずれるので触れないことにした。

2. 調査対象の各辞典の概況

2.1. 井上哲次郎他編『哲学字彙』

『哲学字彙』初版は、哲学関係の出版物が現れた初期頃の明治14年(1881)に刊行されただけに、西周の訳語とともに、その後の哲学用語の成立に多大な影響を与えることになった。これについて、主編者の井上哲次郎自身が昭和5年(1930)に次のように述べたことがある³。

…西周氏と自分の訳語の特に多きを占むることに就いて一言して置くべきであらう。西周氏

は造語に巧妙で哲学の術語には後世学者の襲用するものが多い。氏には奚般氏心理学だの、致知啓蒙だの利学だの諸種の著訳があつて哲学術語の発達に貢献したこと多大である。……自分が哲学術語の発達に尋常ならざる関係を有するのは哲学字彙を編纂した為である。当時邦語にて哲学を講論するに訳語少く甚だ困難したるが為に同志と相謀りて哲学字彙を編纂したのである。……哲学字彙の編纂には和田垣謙三、有賀長雄、中島力造、元良勇次郎諸氏の助力ありと雖も、いつも自分が中心となつて纏めて来たのである。哲学術語の発達に関して自分が多少叙述し得る資格のあるのは全く之が為である。

筆者はかつて初版の訳語をとりあげて詳しく検討したことがあるが⁴、本稿では、『哲学字彙』初版の訳語を、西周の訳語とともに、近代哲学用語の出発点に立つものとして扱い、その他の諸辞典の収録語を、西周と初版の用語と照合させることによって、初版以後に現れた新語を特定したい。

ちなみに、『哲学字彙』（以下『字彙』と略称することがある）には、初版のほか、明治17年(1884)に出版された再版と明治45年(1912)に出版された三版もあるが、調査の辞典を選定するにあつて、この二書を対象から除いた。本稿に先立って、筆者は『哲学字彙』再版と三版の増補訳語について検討したことがあるので、詳しくは拙論に譲りたい⁵。ここでは拙論で述べたことを踏まえ、主として再版と三版を調査対象としなかった理由についてまとめておきたい。

まず、再版と三版自身の内的特徴であるが、『哲学字彙』再版の増補訳語を調べると、近代以後の新語や増補者による造語が比較的多く盛り込まれてはいるものの、一般語が多く哲学用語の増補が少ないうえ、新造語の大半がのちに廃語になったため、現代語に与えた影響は限られている。一方、三版の増補訳語は大量に及ぶだけに、新造された術語も数多く含まれているが、一原語に複数の訳語が対応している場合がよく見られるため、語彙索引がない現状では、訳語の整理と抽出にかなりの労力がかかるのは難点となる。

また、再版と三版をとりまく哲学界の外的環境の変化も無視できない。『字彙』再版に一年ほど遅れて出版された『教育・心理・論理術語詳解』（1885）からは、全部の見出し語に詳細な解釈を施すという哲学辞典のスタイルが出現した。単なる『字彙』のような対訳辞典だけでは、術語の意味を解釈する機能が備わっておらず、社会一般の需要に応じきれなかったためであろう。例えば、明治21年(1888)3月出版の『哲学会雑誌』第14号に掲載した「哲学字彙の編集」という文章では、次のように述べている⁶。

…然るに我邦に行はるるは、元東京大学印行の哲学字彙及び有賀文学士の増補せられたる哲学字彙なりとす。此書大に世に弘行し、其訳語の如き近来著訳者の採依引用する処となりたり。左れとも其目的は主として訳者の便を計りしものなれば、唯英語の某語は之を漢字の何々に當つべきかを知らんとする翻訳者に取りては誠に有益なれども、哲学講究者には少しの便益をも與へざるなり。

つまり、『字彙』初版と再版の役割を評価しながらも、英語を漢字の熟語になおす翻訳者にとって役立つものであるが、術語の解釈がないので、研究者にはとても不便であると指摘している。事実上、三版が世に出た明治末期になると、同類の辞典が相次いで出版されたこともあつて、『字

彙』の哲学辞典としての先進性と訳語の権威性はすでに失われていたと思われる。したがって、三版の代わりに同期のほかの哲学辞典を調査すれば、哲学用語の面では十分なデータを得ることができよう。

2.2. 普及舎編『教育・心理・論理術語詳解』

この辞典は『哲学字彙』初版と再版に続き、明治18年(1885)に刊行されたものである。収録語数は約490語で小型であるが、書名からもわかるように、哲学・論理学の用語だけでなく、教育学と心理学の用語も収録されている。本稿では、教育学の用語を除き、哲学・論理学及び心理学に関する用語を計229語抽出した。

本書の編集者は個人名義ではなく、普及舎となっている。巻頭の「例言」で「本書ニ編述スル所ノ訳語ハ左記ノ書類中ヨリ引用セリ」と言明して、教育学関係の5冊の著書と心理学・論理学関係の4冊の書名をあげている。ただし、『字彙』初版と再版を参照したかどうかについては触れていない。

この辞典では、日本語の術語を見出し語とし、すべての見出し語に詳しい解釈を施しているとともに、巻末には「英和対訳索引」を付して、術語と原語の対訳関係を明らかにしている。『哲学字彙』のような対訳辞典とは別に、術語の解釈を目的とする哲学辞典の新しいスタイルを作り出した意義が大きい。

また、術語の面においても、独自の訳語をとりいれ、『字彙』に追随しない姿勢を見せている。

表3 『字彙』初版と『術語詳解』の訳語比較

共通の原語	『字彙』初版の訳語	『術語詳解』の訳語	訳語の比較
Abstraction	抽象力, 虚凝	抽象	『詳解』の訳語と『字彙』の訳語が相違する
Activity	活動, 軽快	活動力	
Affirmative	説正的, 正面的	肯定述意	
Agent	作因, 代理	要因	
Antecedent	前項, 前率	前事	
Argument	辯論	証説	
Association of ideas	観念聯合	観念ノ伴生	
Authority	政権, 憑拠	威重	
Axiom	单元	公理	『詳解』の訳語が『字彙』の複数訳語中の一語と一致する
Abstract	抽象, 虚形, 形而上	形而上	
Admiration	欽仰, 瞻望, 賞嘆	欽仰	
Affection	感染, 情款	感染	
Approbation	褒揚, 讃美	褒揚	
Association	聯合, 投合	聯合	『詳解』の訳語と『字彙』の訳語が一致する
Analysis	分解法	分解法	
Antipathy	反情	反情	
Attention	注意	注意	

例えば、『字彙』初版と『術語詳解』二書のA部見出し語を例にとってみると、前者は167語、後者は33語と語数の差が大きい、このうち両者共通の見出し原語は17語だけで、収録語のずれも顕著に見られる。この17語について両者の訳語を比較すると次のようになる。

表3で示したように、この二辞典の訳語比較では、『術語詳解』の訳語が『字彙』初版の訳語と相違する部分が相当見られ、『字彙』に対する『術語詳解』の訳語の存在感が強く印象付けられるところである。

2.3. 朝永三十郎著『哲学辞典』

この辞典は、明治38年(1905)に出版されたもので、前項の『術語詳解』との間にちょうど20年の歳月が経っていた。著者の朝永三十郎が「序」において、

従来我邦に於て斯学に関する二三の辞典なきに非るも、そは原訳両語を対照して訳語の標準を示すを目的とせるものか、或は主として教育に関する学語若くは題目を説明するに止まれるものにして、未だ嘗て哲学全豹に亘つて広く学語を説明し、普く斯学研鑽の参考に資せんとする者あらず。

と述べている。それまでに世に出た「二三の辞典」に言及したが、哲学関係の辞典を顧みると、「原訳両語を対照して訳語の標準を示すを目的とせるもの」とは、おそらく『哲学字彙』初版と再版のことであろう。また、「教育に関する学語若くは題目を説明するに止まれるもの」とは、前項の『術語詳解』、あるいは明治36年(1903)に刊行した『教育辞書』(同文館)のことをさしているかと思われる。

また、本書の術語について、著者は巻頭の「凡例」において、

学語は著者の創意によらずして専ら我邦の専門家が其著述若くは講演において現に使用しつつあるものを採用し、且つ諸学者の異訳を出来得る丈け広く網羅せんと力めたり。著者の創意に係るものには、特に「と訳す可きか」、「と訳して可ならんか」等の文字を加へ置けり。

と述べている。これを手掛かりに調べると、著者自身の造語は全体的に少ないなか、特に四字語以下では少なく、長い訳語に偏っていることがわかる。

収録語は術語だけではなく、哲学史上の人名・著書名・学派名なども見出し項目となっている。この種のものは漢字を使わず直接片仮名で音訳しているため、片仮名語の見出しが大幅に増えている。また、見出しには二次的・三次的複合による長大語が多いことも特徴の一つである。例えば、「観念～」に関する見出し項目を見ると、

観念 観念運動的 観念主義 観念性注意 観念的注意 観念的経験論 観念的主理論
観念的実在論 観念論

のように続いている。本稿では、四字以下の基本術語(一次造語)を中心に抽出した。

2.4. 徳谷豊三郎・松尾勇四郎合著『普通術語辞彙』

本書は、朝永三十郎『哲学辞典』に半年ほど遅れて、同年の明治38年(1905)に出版された。著者の名と並んで明治中期頃に活躍した哲学者三宅雄次郎(雪嶺)が校閲者となっている。書名に

は哲学の二字が見られないものの、巻頭の「序」において、「本書の蒐集せる術語が、主として哲学、倫理学、心理学、論理学、美学等の部門に属する術語を以て充たさるる所以なり」と、編集の主旨が明示されている。そして「此等各部門の術語中、其の最も普通に使用せらるべきもの」という術語選定の方針は、書名の「普通術語」となって現れているように思われる。

収録語の特徴から見れば、それぞれの術語に英語とドイツ語の二通りの原語を付するのはそれまでの哲学辞典に見られなかったところである。また、同年に出版した朝永三十郎『哲学辞典』とは違って、人名・著書名・学派名などを対象としなかったのも、収録語のほとんどは漢字術語となっている。具体的に見れば、一部の項目では接尾辞「～的」が付いた類義語も小見出しとして立てられ、その細かい区別について説明している点は特徴的である。例えば、（大見出し－小見出し）「一元論－一元論的、一元的」「一般－一般的」「肉体－肉体的、肉的、肉欲的」のようになっている。このほか、同一概念を表す異形の訳語、例えば、

愛他説／愛他主義　為我的／利己的　伴起／伴生　判断／判定　反定立／反措定
などについても、それぞれ見出しを立てている場合がある。このようなとき、例えば、「為我的」の項目を引くと、「利己的に同じ同条下に就て見られよ」のようになっている。

2.5. 同文館編『哲学大辞書』

この辞典は、同文館が企画した『大日本百科辞書』シリーズの一冊として、明治36年(1903)に編集に着手し明治45年(1912)に完成した全4巻の大作である。書名の「哲学」は広義的な範疇で、収録の分野を見れば、哲学・論理学をはじめ心理学・倫理学・美学・教育学・社会学・法理学・人類学・宗教などと、ほぼ人文科学の全領域をカバーしている。編集者も当時の有名な学者百人近くが動員され、例えば、哲学・論理学などの分野に限ってみても、井上哲次郎、朝永三十郎、桑木厳翼、紀平正美、淀野耀淳、元良勇次郎、松本文三郎など、錚々たるメンバーである。

収録語は約6290語で、4巻という大部の割には少ないと思われるが、有名な学者に執筆を依頼したため、紙幅を惜しまずそれぞれの見出し語につき詳細な解釈が書かれている。本稿では、哲学・論理学・認識論・心理学関係の基本術語を563語抽出し検討の対象とした。

なお、大正15年(1926)には本書の追加巻が出版されている。その「凡例」によると、「『追加』掲出の項目は……『大辞書』編纂以後に起こりたる学説・学語・学者・思想運動等の名目を主とし、尚之に旧編纂に漏れたる者、及び旧解説の補ふ可き項目を増補せり」とあるように、新語の追加を主要目的としている。追加巻を実際に調べると、例えば、「階級闘争」「環境」「官僚主義」「記号論」「剰余価値」「肉体労働」など、それまでに見当たらず、大正期に定着した術語が含まれているのがわかるが、本稿では、大正期の術語を次の『岩波哲学辞典』に譲ることにして、追加巻を用語抽出の対象から外した。

2.6. 宮本和吉他編『岩波哲学辞典』

この辞典は「四年間の歳月と六十余家の努力とによって（序）」、大正11年(1922)に出版されたものである。本書は人文科学系の20分野の術語を網羅しており、哲学関係の執筆者は、当時第一

線で活躍している宮本和吉、桑木巖翼、紀平正美、朝永三十郎、西田幾多郎、高橋里美らが中心となっている。

10年前の同文館編『哲学大辞書』と比べれば、見出し語数は5～6000語前後で大差がないが、見出し語の解釈に使用された関連術語についても、傍点の記号と原語が添えられ、巻末の索引で検索できるようになっているので、本書の検索に登録された見出し語は約1万1千余語に達している。これを概観すると、西洋の人名・著書名などを記す片仮名語や7～8字以上の長大漢字訳語の増加が特に目立っているとともに、

絶対～ 絶対概念 絶対印象 絶対記憶 絶対空間 絶対名辞 絶対理性…

絶対的～ 絶対的反射 絶対的必然 絶対的一者 絶対的依属 絶対的価値…

のように、術語の細分化が顕著に現れている。本稿では、あくまでも一次造語による哲学の基本用語を抽出する方針に従うので、このような二次的複合語はほとんど抽出の対象から外した。

2.7. 渡部政盛著『最新哲学辞典』

本書は『岩波哲学辞典』に少し遅れて大正12年(1923)の初めに出版されたものである。前者の大部に及ばず、編者は「序」において「手頃にして而も其の内容の精撰されたる民衆の辞典」それに「語数は出来るだけ多く、…特に現代哲学に関するものは一も漏らさざるやう注意」するとの方針を打ち出している。また、本書の編集に際して、朝永三十郎『哲学辞典』(1905)、同文館『教育大辞書』(1907)、同『哲学大辞書』(1912)、勝屋英造『新しい主義学説の字引』(1920)、『岩波哲学辞典』(1922)などの既刊の辞典類が参照されたとのことである。

漢語の代わりに外来語の増加が著しくなった大正期の流れを反映したかのように、この辞典でも、片仮名語の比率は明治期の哲学辞典と比べて明らかに増えている。このうち、特に注目したい現象としては、同一の原語に対して、片仮名の音訳語と漢字の意訳語の両方が共存している例の多いことである。例えば、

共産主義／コンミュニズム 国家社会主義／ステートソシアリズム

資本主義／キャピタリズム 帝国主義／インペリアリズム 写実主義／リアリズム

利己主義／エゴイズム 機制論／メカニズム 範疇／カテゴリー 力本説／ダイナミズム

のようになるが、最終的には、漢字訳語が定着したものと音訳語が定着したものという二つの方向へ分かれていった。大正期後半の哲学用語は、まさにこのような分化現象が起きる時期に当たっているように思われる。ただし、本稿では漢字訳語だけを対象としているので、これ以上触れないことにする。

2.8. 昭和期の二種の『哲学用語辞典』

前述の『岩波哲学辞典』(1922)から敗戦にかけて、大型の哲学辞典は再び現れなかった。敗戦直後の昭和25年(1950)に出版された高山岩男編『哲学用語辞典』は、約600語収録される小型辞典である。語数が少ないだけに、哲学と論理学関係の術語に限られ、人名・学派名といった片仮名語はほとんど含まれていない。また、片仮名の音訳語が見出し語となった場合では、例えば、

アウフヘーベン（止揚又は揚棄と訳す） アナムネシス（想起と訳す）

イデオロギー（マルクス主義の用語としては観念形態・意識形態の意）

ディアレクティク（辯証法と訳す） ニヒリズム（虚無主義と訳す）

パラドックス（逆説と訳す） ヒューマニズム（人文主義の項を見よ）

のように、その解釈の中で漢字訳語が示されているものが見られる。これは前項の『最新哲学辞典』（1923）で述べた漢字訳語と音訳語の共存現象と相似たようなものと考えられる。

村治能就編『哲学用語辞典』は、前書に隔てること24年、昭和49年(1974)に出版された。戦後、哲学諸学説の新旧交代が行なわれたとともに、新出語はむろんのこと、既存術語の片仮名語化も加わって、哲学用語の変貌が緩やかに進んでいた。本書が出版された時点において、明治・大正期に創出された哲学用語はどう変わったか、または、昭和期にどんな漢字訳語が新造されたかがチェックできるところに本書の利用価値がある。

3. 哲学用語の抽出と分類

3.1. 哲学用語抽出の基準

これまでの哲学用語に関する調査は、主として、明治初期の西周の著訳書及び『哲学字彙』の各版に集中して行なわれていた。西周の著訳書に関しては、例えば、栗島紀子(1966)、手島邦夫(1998、1999)などによって用語抽出の方法をまとめると、西周の原著から用例を採集する点や訳語と判断できるものに限定して抽出するという方針においては、互いに共通している。訳語とは、原語がそのまま載っているものや、片仮名で英語の原語を記したもの、および片仮名で示した原語の下に訳語を記したものなど、つまり対訳関係がはっきりとわかるものをさすが、実際に抽出された用例を見ると、語だけでなく句も採り、漢語だけでなく和語・混種語も採っているようである。

本稿では、哲学辞典類の収録語の中で西周の用語を特定するためがあるため、西周の用語調査もデータ集めの一環として先行させた。方法としては、西周の主な著訳書から用語を抽出し、西周の用語リスト（延べ1672語、異なり1172語）を作成した⁷。用語の抽出にあたって、対訳関係が示された訳語に限らず、西周の著訳に見られた漢語であれば幅広く採集した。ただし和語・混種語・外来語あるいは句単位のもの対象外とした。一方、哲学辞典類も明治末期のものになると、収録語がかなりの量に達しており、主要語にしばって抽出するため、先ほどの西周用語をも含め、抽出の基準については、次のように決めている。

対象とする語

- ①語構成的には、二字・三字・四字構造の漢語を中心に抽出する。
- ②語義的には、哲学の基本概念を表す基本術語を中心に抽出する。
- ③日中における哲学用語の借用関係を念頭に、中日同形の術語に留意して抽出する。

対象としない語

- ①固有名詞（伊藤仁斎、アダム・スミス、韓非子、成実論、般若経…）
- ②外来語・音訳語・混種語（イデオロギー、巴里派、新プラトン主義…）
- ③一字漢語（愛、善、偽、覚、義、気、我…）

④句および長い複合語（主我の情、開いた社会、無意識的淘汰、非自由意志説…）

⑤哲学以外の専門語（正音法、星雲説、往生、水棲動物…）

⑥哲学以外の一般語（習練、席順、暗黒時代、救世主、天理人欲…）

なお、哲学用語の中でも、「包摂」「超絶」「循環論証」のように、日常生活との関わりが薄く、より専門語的なものと、「意識」「本能」「合理主義」のように、ふだんでもよく使われる、より日常語的なものがある。哲学という学問自身も、広義的または狭義的という捉え方の相違によって、分野の広さがかなり違ってくる。したがって、ここでの哲学用語は、厳しく定義されるようなものではなく、哲学辞典類の収録語を一般的にさす呼び方である。

3.2. 抽出語の整理と分類

以上の原則に基づいて、『字彙』初版を除く8種の哲学辞典(表2)から延べ3172語を抽出した。この中から互いに重複する語を除き、異なり語数で1440語を得た⁸。この1440語の中にも、なお定着度の低い語や哲学以外の語が多く含まれ、整理する必要があるので、全体の約半数に及ぶ1種の辞典にしか収録されない730語の中から、現代に生きている語を中心に172語選び出し、その他の558語を除外した。このような整理の後に得た異なり語の881語が、小稿の検討対象となっている。

また、各辞典の収録語の性質からみれば、およそ三種類の語が入り混じって共存していると考えられる。三種類の語とは、(1)西周と『字彙』初版の訳語、(2)先行する哲学関係の他の出版物から取り入れた既存の術語、(3)各辞典で増加した新出の術語、のことである。ただし、現時点では、明治期の哲学書についての用語調査がまだ作業の途中にあり、当面(2)に属する語の特定が難しいため、本稿では、さしあたり抽出語を「西周と『字彙』初版の用語」と「西周と『字彙』以外の用語」に二分して検討していくことにする。この二部類の下位分類として、さらに10タイプに細分し、次のような枠組みを用意した。

表4 哲学辞典抽出語の分類と所属語の性質

	分類の略称	分類の意味	所属語の性質
西周と 字彙の 用語	西周	西周の著述で用いられた訳語	西周に由来する訳語
	西	西周の訳語に基づいた派生語	
	西周／字彙	西周と『哲学字彙』初版共有の語	『字彙』経由で受け継がれた西周の訳語
	西／字	西周と『字彙』初版の訳語に基づいた派生語	
	字彙	『哲学字彙』初版で用いられた訳語	『字彙』に由来する訳語
	字	『哲学字彙』初版の訳語に基づいた派生語	
それ 以外 の 用語	出典あり	古い漢籍に出典がある語	在来語の伝承
	新義あり	出典があるが新義に転用した語	在来語の転用
	出典なし	『漢語大詞典』にあるが漢籍の出典がない語	訳語・新漢語の創出
	『漢詞』未見	『漢語大詞典』には収録されていない語	

表4の「分類の略称」を用いて各タイプの語を説明すると、「西」タイプの語とは、「本体論」「人道主義」「客観化」のように、西周自身が「本体」「人道」「主義」「客観」などの語を単独で使用

していたものの、他の造語要素「～論」「～主義」「～化」と複合した語例が見当たらないものをさす。この種の複合語は、いわば西周の訳語に由来した主成分に後の時期から接辞がついてできたものと認められるので、「西」タイプと名付けたのである。「字」タイプも、該当語の主成分が『字彙』初版に由来したということで、「西」タイプに準じて名付けた。なぜなら、例えば「本体論」「人道主義」「客観化」諸語の語誌的記述をしようとする場合、語源的には西周の訳語と『字彙』初版の存在が無視できないと考えたからである。

また、西周と『字彙』以外の用語については、その出自の状況を把握するために、『漢語大詞典』（羅竹風主編、1994）によって、古い漢籍における出典の有無を逐語的に確認してみた。このうち、「出典あり」と「新義あり」タイプの語は、ともに古い漢籍に出典のあるものであるが、前者は昔の語義がそのまま受け継がれたもので、後者は訳語となる時点で新しい語義に転用されたものをさす。「出典なし」タイプの語は、『漢語大詞典』によって見る限り、漢籍の出典がないが、中日の現代語で共有する同形語という点で考えれば、日本で創出された後、中国語に移入されたとの可能性が強いものである。前述の3タイプの語はいずれも『漢語大詞典』に収録されているのに対して、『漢詞』未見タイプの語は、中国で出版された『漢語大詞典』に収録されていないものである。日中語彙の影響関係がなく、日本語特有の和製漢語であろうと推測されるものである⁹。次に、以上の分類に基づき、哲学辞典に収録された各種語の性質を詳しく見てみよう。

4. 哲学辞典にある西周と『字彙』初版の用語

さきに、西周と『字彙』初版の訳語が近代哲学用語の創出期において開拓的な役割を果たしたことを述べた。しかし、西周と初版の訳語のうち、どんな語が後続の哲学辞典に受け継がれたかはまだ不明で当面の課題である。そこで筆者は、まず、自作の西周用語リストと『字彙』初版の訳語総索引（飛田良文編、1979）を使い、抽出した881語と照合することによって、各辞典にある西周と初版に由来した用語を計503語割り出した。つづいて、この503語の性質をより細かく区別するために、表3で示した下位分類によってさらにグループ分けをした。ここでは、辞典時期別と収録辞典数という二つの視点から、それぞれ所属語の性質を検討してみたい。

4.1. 辞典時期別から見た西周と初版の用語の特徴

各辞典において、西周と『字彙』初版の用語はどう分布しているかという全体像を得るために、表5を作成した。（各辞典は、区別しやすいように著者名と出版年で示す）

表5では、先行の辞典にあった語を差し引いて異なり語数で示しているので、各辞典における西周と初版の用語の初出語数を把握することができる。これによって、西周と初版用語のいくつかの外的特徴をとらえることができる。

（1）各辞典に見られた西周と初版の用語及びこれに基づいた二次的造語の総数は503語となっている。おそらく後世に伝えられた西周と初版の主な用語はほとんどこの範囲内に収められているかと思われる。その内訳を見ると、「西周」「西周／字彙」「字彙」3タイプの語は、西周の著述と『字彙』初版でそのまま用いられたもので、全語数の8割以上（419語）を占めている。西周と

表5 辞典別から見た西周と初版の用語

	哲学辞典	西周	西周/字彙	字彙	西	西/字	字	初出語合計
明治	普及舎1885	16	72	29	0	1	2	120 (23.9%)
	朝永1905	16	43	42	2	11	15	129 (25.6%)
	徳谷1905	18	29	38	2	7	12	106 (21.1%)
	同文館1912	13	22	34	1	6	8	84 (16.7%)
大正	宮本1922	8	10	13	1	4	6	42 (8.3%)
	渡部1923	1	3	6	0	0	2	12 (2.4%)
昭和	高山1950	2	0	2	0	0	4	8 (1.6%)
	村治1974	0	0	2	0	0	0	2 (0.4%)
	類別合計	74	179	166	6	29	49	503 (100%)

初版の新造語もこの3タイプの語の中から見つけ出すことになる。一方、「西」「西/字」「字」3タイプの語は、西周の著述と初版に見られる用語に接尾辞などを付けて構成した派生語が中心であるが、現代まで生き続けてきた重要語も多いので、これについても検討すべきである。

(2) 各種語のうち、「西周/字彙」と「字彙」タイプの語がとくに多いことが注目される。「西周/字彙」タイプの語が多いことから、哲学用語創出における西周の中心的役割を証明すると同時に、西周の訳語が『字彙』初版に受け継がれ、初版経由で一般化した経路も裏付けられている。一方、「字彙」タイプの語が多いことから、『字彙』初版は西周の訳語を吸収すると同時に、自らも数多くの新語を生み出している事実を確認することができる。

(3) 西周と初版の用語は、とくに明治期の哲学辞典において集中的に現れていることが明らかになった。明治期4辞典の初出語を合計すると、全用語の9割近く(87.3%)がすでに収録済みということがわかる。これは、明治期における西周と初版用語の影響力がとくに強かったことを物語っている。

次に、まず西周と初版用語の周辺に位置する派生語と大正期以後の収録語から見ていこう。

4.1.1. 西周と初版の用語に由来した派生語

「西」「西/字」「字」3タイプの語は、二次的造語による派生語とはいえ、今日でも欠かせない哲学用語が多く見られるだけでなく、その影響は海を越えて中国の現代哲学用語に及んでいるので注目に値する。初出辞典別にこれらの語を示すと次のようになる。

(1) 「西」タイプの語(6語)

刺激 本体論(朝永1905) 決定論 人道主義(徳谷1905)

所有権(同文館1912) 超越性(宮本1922)

「本体」「決定」「人道」「所有」「超越」などの語自身は、漢籍の出典があり西周の造語ではないが、西周の著述で使われていたのが、のちに「本体論」「決定論」「人道主義」「所有権」「超越性」といった諸語の形成につながった可能性があるのここに入れた。また、「刺激」は、西周の『生性発蘊』(明6)や『心理学』(明11)において「刺戟」という語形で使われていた。単なる用字の違いなのか、それとも新義の出現と関係しているのかは追究すべきところである。この語は古

代・近代を問わず漢籍での用例がごくわずかで、未だに語源不明というべきである。

(2)「西／字」タイプの語 (29語)

不容間位ノ法 (普及舎1885)¹⁰

印象主義 観念論 原子 実在論 主我説 認識論 必然性 弁証法 目的論 理想主義
連鎖式 (朝永1905)

印象派 機械論 客観性 現実性 主観主義 理想化 連鎖法 (徳谷1905)

確実性 詭弁学派 実用主義 小概念 大概念 中概念 (同文館1912)

資本主義 主観性 同一性 同一律 (宮本1922)

このうち、西周の著述と初版に見られる「客観」「主観」「印象」「資本」「同一」などに対して、哲学辞典の類では「客観性」「主観性」「主観主義」「印象主義」「資本主義」「同一性」「同一律」などの派生語が多く出現し、しかも重要概念として定着している。接辞による二次的造語は哲学用語の生成パターンの一つとして大きな役割を果たしていたといえる。また、西周と初版の用語では monad の訳語としてともに「元子」が使われていたが、「朝永1905」になると、「元子」「原子」の2語形が並べられ、原語も Atom に切り替わっている。語誌的観点からはこのような変化を記録しておく必要があろう。

(3)「字」タイプの語 (49語)

原形質 自然法 (普及舎1885)

厭世説 懷疑論 活力説 契合法 原子論 合理論 三段論法 自然主義 主他説 循環論証
汎意論 煩瑣哲学 矛盾律 予定調和 楽天観 (朝永1905)

愛他主義 厭世主義 快樂説 機制論 共産主義 虚無主義 偶然性 原形 功利主義
功利説 神秘主義 独断論 (徳谷1905)

一般化 厭世観 换位法 犬儒学派 嚴肅主義 社会学 逍遙派 適者生存 (同文館1912)

活動説 社会主義 絶対主義 折衷主義 普遍性 分子説 (宮本1922)

現実主義 人性論 (渡部1923)

快樂主義 合理主義 相對主義 否定の否定 (高山1950)

『字彙』にある派生語は他の項目をかなり上回っている。後世の哲学用語に与えた『字彙』の影響は、西周の用語よりももっと直接的であったことの現れだといえよう。上掲した「原形質」「三段論法」「循環論証」「煩瑣哲学」「予定調和」「犬儒学派」「適者生存」の諸語は、『字彙』初版ではそれぞれ「元形質」「三断論法」「循環証拠」「煩瑣理学」「予定和合」「犬儒教」「適種生存」となっているが、初版の訳語を踏まえて語形の修正が行なわれたと思われる。術語生成の過程を顧みると、語形が少しずつ変化して現行の術語に定着していくというケースは決して珍しいものではない。

4.1.2. 大正期以後に収録された西周と初版の用語

表5によって、西周と初版用語の9割近くがすでに明治期の哲学辞典に収録されていたことがわかったが、残りの1割余りは、大正期以後になってはじめて哲学辞典に収録されるようになった。

たものである。これらの語をタイプ別にあげると次のようになる。

(1) 「西周」タイプの語 (11語)

決断 従属 主張 成立 総体 体験 変換 夢想 (宮本1922)

潜在 (渡部1923) 技術 了解 (高山1950)

(2) 「西周／字彙」タイプの語 (13語)

演繹 記号 区別 契約 昏睡 神学 媒介 品位 部分 法律 (宮本1922)

生命 全体 予定 (渡部1923)

(3) 「字彙」タイプの語 (23語)

寡頭政治 活力 帰謬法 区分 現象学 思弁哲学 集合 独断 忍耐 批判 変化 偏見
模型 (宮本1922) 可能 質量 社会 秩序 内界 理由 (渡部1923)

懷疑 逆説 (高山1950) 絶望 対立 (村治1974)

(4) 「西」タイプの語 (1語)

超越性 (宮本1922)

(5) 「西／字」タイプの語 (4語)

資本主義 主観性 同一性 同一律 (宮本1922)

(6) 「字」タイプの語 (12語)

活動説 社会主義 絶対主義 折衷主義 普遍性 分子説 (宮本1922)

現実主義 人性論 (渡部1923)

快楽主義 合理主義 相対主義 否定の否定 (高山1950)

前三者の語を見ると、「演繹」「神学」「寡頭政治」「帰謬法」「現象学」「思弁哲学」などの数語は、西周と『字彙』初版の新造語と指摘できるが、その他の語は、純粋な哲学用語とはいえないので、西周と『字彙』初版に直接由来したというよりも、ほかの経路によって哲学辞典に取り入れられた可能性が高いと思われる。また、後三者の語を見れば、接尾辞の複合による派生語が中心となっている (4.1.1.を参照)。「～性」「～主義」「～説」「～論」などの接尾辞は、いずれも『字彙』初版のときから見られたものであるが、ただし上掲の派生語が造られたのは大正期になってからのことと推察される。

4.2. 収録辞典数から見た西周と初版の用語の特徴

哲学辞典で西周と初版用語を調べてみると、収録辞典数が多いものもあれば、少ないものもあってさまざまである。収録辞典数の多いものは、ある意味では、西周と初版用語の中でもより中心的で重要語に属するものと考えられるので、これらの重要語を抽出するためには、収録辞典数から西周と初版用語の分布状況を見てみる必要がある。

表6をみれば、収録辞典数が少なくなるにつれ、所属語数が逆に増え、とくに収録辞典数3種以下の欄には多くの語が集中していることがわかる¹¹。次に、収録辞典数の多い順にしたがって、各タイプの所属語を示すことにするが、「西」「西／字」「字」の3タイプの語については、すでに4.1.1.で掲げたので、ここでは、「西周」「西周／字彙」「字彙」の3タイプの語を中心に検討してみたい。

表6 収録辞典数からみた西周と初版の用語

収録辞典	西周	西周/字彙	字彙	西	西/字	字	所属語数
8種	0	5	1	0	0	0	6
7種	3	18	7	0	2	2	32
6種	3	21	11	0	1	3	39
5種	5	22	11	2	3	5	48
4種	10	26	22	1	5	7	71
3種	15	29	1	22	166	2	1
2種	24	34	7	36	0	1	6
1種	14	24	11	47	0	1	0
合計	74	179	11	31	0	1	2

4.2.1. 「西周」タイプの語

西周の著述または初版で用いられた語は、すべてが新造語というはずがなく、古い漢籍に出典を持つ語をはじめ、在来語を訳語として採用した場合が相当多いと考えられる。このような異質の語が混在する西周と初版用語の中から新造語を特定することは、本稿の目的の一つとなっている。そのため、以下では西周と初版用語の出自がわかるように、大きく「漢籍に出典がある語」と「漢籍に出典がない語」に類別しておいた。「漢籍に出典がある語」のうちには、古来の意味を受け継いだものもあれば、新しい意味に転用されたものもある。これに対して、「漢籍に出典がない語」は主として明治以後新造された和製漢語となる。それぞれ「伝承」「転用」「新造」で略記する¹²。（下線は新義に転用された語を示す。以下同様）

表7 収録辞典数から見た「西周」タイプの語（74語）

収録辞典	漢籍に出典がある語（伝承・転用）	漢籍に出典がない語（新造）
7種（3語）	規範, <u>表象</u> , 本体	
6種（3語）	価値, <u>論証</u>	美術
5種（5語）	傾向, 超越, 分類, 法則	消極的
4種（10語）	素質, 体験, 調和, 定理, 動作, 本務, 妄想	仮定, 積極的, 能動
3種（15語）	運動, 観想, 空想, <u>芸術</u> , 根拠, 差異, 差別, 性格, 責任, 品性, 分析	細胞, 実質, 所動, 反射
2種（24語）	階級, 感触, 技術, 教化, 境界, 宗派, 条件, 情欲, 追憶, 天然, 徳性, 変態, 包含, 報復, 了解, 歴史	仮想, 緊張, 経済学, 自由主義, 視神経, 伴生, 付着力, 放任主義
1種（14語）	臆測, 決断, 従属, 主張, 種類, <u>成立</u> , 同感, 肉体, 変換, 夢想	潜在, 総体, 特権, 認知

「西周」タイプの語では、「漢籍に出典がある語」が大きな比重を占めているのが注目される。森岡健二氏は、在来の漢語を新しい概念の対訳に用いる方法を「置き換え」と名付け、「初期の訳

語は、大部分、江戸時代の漢語に依存していることになる。この後、しだいに、新漢語をふやして、単純な置き換えを避ける傾向をとる…」と述べたことがあるが¹³、西周の訳語と関連付けて考えると、まさにその通りである。「置き換え」によって多少の語義変化が生じるのは当然であろうが、古義が完全に取って代わられる程度の変化となると、「新義への転用」として類別する必要があると考えている。

例えば、「芸術」は、古い漢籍では「占い・医療などを含む方術のこと」を表したようであるが、西周が『百学連環』（明治3年）において、liberal art の訳語として使用し、「芸は心思を働かす辞義にして、詩文を作る等の如きものなり」（総論）と説明した。これは、「芸術」がのちに art の訳語として定着したのになんらかの影響を与えたと思われる¹⁴。

しかし「階級」は、漢籍では「地位などの等級」を意味したが、西周の『生性発蘊』（明治6年）では「凡テ世ニ知レタル機性動物ヲ、大別区分シテ、上下相連ナル階級内ニ、排列セリ」（第十八章）とあるように、依然として「等級」の旧義を踏襲している。「階級」に「利害関係を持つ人間集団」という新義が生まれたのはずっと後のことで、哲学辞典類では、同文館1912に「労働階級」、宮本1922に「階級組織・無産階級」、渡部1923に「階級闘争」などの語が収録されている。

「漢籍に出典がない語」については、「美術」「仮定」「能動」「所動」「仮想」「緊張」「自由主義」「放任主義」「潜在」「総体」「認知」などがほぼ西周の造語と推定できるが、哲学の分野を出ると、例えば「消極的」「積極的」「細胞」「視神経」などのような蘭学者に由来した語、「経済学」「反射」「付着力」のような西周と同時期の人が造語した語も見られるので、精査の上判断すべきである。

4.2.2. 「西周／字彙」タイプの語

この部類に属する語は、まず西周によって造語または使用され、その後『字彙』初版に受け継がれて一般化したと考えたほうが自然である。各タイプの中でも語数が最も多いことから、西周用語の大部分が『字彙』初版經由で後世に伝えられたといえることができる。

表8 収録辞典数から見た「西周／字彙」タイプの語（179語）

収録辞典	漢籍に出典がある語（伝承・転用）	漢籍に出典がない語（新造）
8種（5語）	理性	外延，概念，客観，主観
7種（18語）	意識，觀念，記憶，現象，悟性，知覚，物質，本質，命題	一元論，演繹法，感性，帰納法，現実，抽象，哲学，内包，包摂
6種（21語）	印象，觀察，偶然，具体，三位一体，実在，実体，情緒，衝動，性質，先天，体制	義務，肯定，情操，属性，定義，動機，否定，本能，理想
5種（22語）	異端，科学，關係，経験，原因，行為，後天的，再生，思惟，時間，事実，自由，想像，組織，断定，転化，認識，能力	概括，感覚，空間，直覚
4種（26語）	異教，臆説，拡充，官能，帰納，材料，自覚，実験，主義，純粹，信仰，真理，精神，存在，知識，直接，反対，比較，批評，方法	元素，受動，触覚，心理学，生理学，目的

3 種 (29語)	愛情, 意見, 彙類, 過失, <u>外界</u> , 感応, 機械的, 規則, 形象, 限定, 権利, 行動, 国体, 自愛, 執意, 思慮, 勢力, 天賦, 媒介, 比例, 必然, 部分, 理法	再現, 図式, 大脳, 単元, 断言, 表現
2 種 (34語)	悪意, 意象, 演繹, 含蓄, 感動, 記号, 詭弁, 基本, 形而下, 形而上, 幻想, 功績, 錯乱, 自重, 充実, 手段, 証拠, 生命, 全体, 相關的, 物体, 法律, 模倣, 類似, 連続	回回教, 感受性, 元子, 小反対, 神学, 想像力, 造物主, 通性, 分解法
1 種 (24語)	過激, 境遇, 区別, 形質, 形状, 契約, 権威, 梗概, 混合, 昏睡, 試験, 転換, 品位, 偏執, <u>保守</u> , 唯一, 予定, 靈魂	学派, 全称, 單純, 単称, 特称, 猶太教

「西周／字彙」タイプの語では、「漢籍に出典がある語」が全体の約7割を占めている。これは、前述の「西周」タイプと同様に、いわゆる「置き換え」の在来語が西周の訳語において多用されていた証拠として受け止められるが、なかには、下線を引いた語のように新しい意味が付与されたものも見られる。ただし、新義の発生はすべて西周一個人の使用によってもたらされたとはいえず、例えば「関係」「時間」「組織」「保守」などは、西周に先立ってすでに新義が出現したようである。一方、哲学・心理学用語に関しては、西周の先駆的な立場を考えると、西周がさきに新義に転用したのがきっかけとなって、現代義への定着に導いたと思われるものが比較的多かったといえる。

例えば、「命題」は、古い漢籍では「詩文の題目を命ずる（言い付ける）」の意であったが、西周の『百学連環』（明治3年）と『致知啓蒙』（明治7年）などで proposition の訳語として用いられたのがきっかけで今日の定訳となった。「科学」は、漢籍では「科举の学」の意であったが、西周が『知説』（明治7年）で「然ドモ所謂科学ニ至テハ、両相混ジテ判然区別ス可ラザル者アリ。譬ヘバ化学ノ如シ…」と述べたのは、science の新義が生じた証拠だとされている¹⁵。

しかし、「官能」は、古い漢籍では「官吏の才能」の意であったのに対し、西周の『生性発蘊』では、「纖維ト機官トハ解剖学ノ論スル所、性質ト官能トハ生理学ノ論スル所ナリ」（第十八章）のように、「人体器官の働き」の意に用いられていた。この両者の間には意味的な関連性がまったくないので、新義への転用というよりも、中日両国で別々に造られた漢字語の語形が偶然に一致したと解釈したほうが事実に近い。このような日中分立の語が少数ながら存在することにも留意すべきである。

「漢籍に出典がない語」には、西周の新造語がとくに集中しているように見られる。例えば、収録辞典4種以上の語のうち、蘭学時代から来た「現実」「義務」「空間」「元素」「触覚」「目的」の数語を除けば、その他はほとんど西周の造語と認められる。収録辞典3種以下の語の中でも、哲学用語を中心に見れば、少なくとも「単元」「断言」「感受性」「元子」「小反対」「分解法」「学派」「全称」「単称」「特称」の諸語は西周の造語と推定できる。

4.2.3. 「字彙」タイプの語

明治中期以後になると、哲学用語に関しては、その根拠を西周の原著に求めるよりも、『哲学字彙』にあるものを直接利用することがますます増えた。『字彙』初版の用語が後続の哲学辞典に数多く取り入れられたこともこのような成り行きの裏付けだといえよう。

前述の2タイプと違って、「字彙」タイプの語では、「漢籍に典拠がない語」つまり新造語の数

表9 収録辞典数から見た「字彙」タイプの語（166語）

収録辞典	漢籍に典拠がある語（伝承・転用）	漢籍に典拠がない語（新造）
8種（1語）	意志	
7種（7語）		形而上学，常識，二元論，範疇，唯心論，唯物論，有機体
6種（11語）	延長，帰結， <u>推論</u> ， <u>絶対</u> ， <u>相對</u> ，内省	宇宙論，原理，前提，大前提，二律背反
5種（11語）	<u>思想</u> ，思弁，証明，節制，同情	経験論，宗教，小前提，人為淘汰，反省，倫理学
4種（22語）	志向，自然，順応，同化，普遍，矛盾，様式， <u>理論</u> ，良心	可能性，間接，偶有性，後件，視覚，思弁哲学，進化論，人類学，整合，方法論，味覚，名辞，名目論
3種（36語）	虚偽，結果，外道，健忘，合理的，実践的，自発的，習慣，注意，超絶，派生，批判，平等，変化	蓋然性，格率，機制，教権，偶性，元子論，現象学，個体，催眠術，自然神学，自然神教，自然淘汰，進化，生存競争，折衷学派，全称命題，特異性，特称命題，法理学，唯理論，利他主義，理由
2種（47語）	意義，依從，応用，懷疑，活動，競争，偶像，現示，性癖，創造，知力，道念，独断，忍耐，標準，賓位，分化，無限，有限，抑制，理学，聯合，論法	回想，拡充命題，换位，還元法，觀念力，基督教，帰謬法，虚無論，激因，肯定命題，宿命論，政治学，推測式，生物学，大名辞，多神教，单称命題，秩序，統計学，特性，内界，萬有神教，瞑想，要素
1種（31語）	一般，可能，感化，感激，契合，自制，集合，資料， <u>成分</u> ，絶望，退歩，対立，偏見	価格，活力，活力論，寡頭政治，逆説，区分，作用，質量，社会，信任，推断，推度，推量，拝物教，本位，本性，模型，要点

が典拠のある語の数を上回っている。また、二字語よりも三字・四字語の増加がとくに目立っている点も注目される。新語のうち、西周の用語をベースにしたと思われる修正語または派生語が多く見られる。例えば、（西周の用語→初版の修正語・派生語）

宇宙→宇宙論 蓋然→蓋然性 拡充→命題→拡充命題 還元→還元法 觀念→觀念力
 経験→経験論 形而上→形而上学 現象→現象学 元理→原理 肯定→命題→肯定命題
 神学→自然神学 人類→人類学 推測→推測式 政事学→政治学 生存→生存競争
 全称→命題→全称命題 单称→命題→单称命題 特称→命題→特称命題 方法→方法論
 名目学→名目論 有機性体→有機体 倫理→倫理学

このように、西周の用語は、「西周」と「西周／字彙」タイプのように、直接に後世の哲学用語

に影響を与えただけに止まらず、「西」タイプ及び上掲諸語のように、下敷きになって間接的に後世の哲学用語に影響した側面も無視できないと思う。

『字彙』初版の新造語には二字語が比較的少なく、「価格」「機制」「個体」「推断」「整合」「前提」「特性」「範疇」「要素」「要点」「理由」などがそれである。三字語と四字語は、二次的複合語が多いため、複合前の語基の出現時期まで溯る必要があるかもしれないが、少なくとも「寡頭政治」「経験論」「形而上学」「催眠術」「思弁哲学」「小前提」「大前提」「二元論」「二律背反」「拝物教」「唯心論」「唯物論」「唯理論」などは『字彙』初版の新造語と推定できる¹⁶。

5. 哲学辞典にある西周と『字彙』以外の用語

西周と初版の用語については、すでに一部の研究成果が見られ、その全体像が解明されつつある。これに対し、西周と『字彙』以外の哲学用語については、先行研究が少ないため、造語の時期はもちろん、用語の範囲でさえ未だに不明である。本稿では、さしあたり西周と『字彙』以外の哲学用語を概観することからとりかかっていきたい。

次に、西周と初版の用語と同様に、辞典時期別と収録辞典数の二つの視点から検討していく。

5.1. 辞典時期別から見た西周と初版以外の用語の特徴

哲学辞典類で抽出した881語から西周と『字彙』初版の用語を除いた残りの378語はこの部類に属する。この部類の語が各辞典でどう分布しているかをとらえるために、本稿の表4で示した下位分類に基づいて、次の表10を作成した。表中の「初出語」とは、ある用語がはじめて哲学辞典に収録された時期を示したもので、初出例の意味ではない。哲学辞典の二次的資料の性質を考えると、たとえ「出典なし」の語であっても、辞典の編集で創出された新語とは限らず、先行の哲学書などで初出例を求める必要があるが、この表によって、ある程度在来語と新出語の範囲が明確になるので、創出時期の特定に便利である。

表10 辞典時期別から見た西周と初版以外の用語

	哲学辞典	出典なし	『漢詞』未見	出典あり	新義あり	初出語合計
明治	普及舎1885	4	8	4	0	16 (4.2%)
	朝永1905	40	28	20	1	89 (23.6%)
	徳谷1905	22	27	21	4	74 (19.6%)
	同文館1912	28	42	31	5	106 (28.0%)
大正	宮本1922	26	15	16	2	59 (15.6%)
	渡部1923	5	6	2	1	14 (3.7%)
昭和	高山1950	4	8	2	2	16 (4.2%)
	村治1974	0	1	3	0	4 (1.1%)
	類別合計	129 (34.1%)	135 (35.7%)	99 (26.2%)	15 (4.0%)	378 (100%)

表10によって次のことがわかる。

(1) 明治期の4辞典に収録された西周と初版以外の用語は、計285語で全語数378語の75.4%を

占めている。とりわけ、明治38年（1905）の2辞典と明治45年（1912）の辞典に収録されているものがそれぞれ上位の比率を見せている点が注目される。これは、『字彙』初版が刊行された明治14年から明治末年までの時期において、哲学用語の創出がとくに活発に行なわれていたことの現れだといえよう。大正期以後になると、新語の出現がしだいに減少していき、いわば哲学用語創出の終焉期を迎えたと思われる。

（2）「出典なし」と『漢詞』未見」タイプの語は、中日共通か日本特有かで区別しているが、ともに古い出典が見当たらず、明治以後の新造語と推定されるものである。この2タイプの語を合計すれば、264語となり全語数の69.8%を占めている。これに対して、「出典あり」と「新義あり」タイプの語は、古義の伝承か新義への転用かで区別しているが、ともに古い出典が見られるので、在来語の部類に属するものである。この2タイプの語は計114語で全語数の30.2%に当たる。つまり、西周と初版以外の用語では、約7割の新造語と約3割の在来語が含まれているということになる。

表11 収録辞典数から見た西周と初版以外の用語

収録辞典	出典なし	『漢詞』未見	出典あり	新義あり	所属語数
8種	0	0	0	0	0
7種	6	0	1	0	7
6種	5	6	1	1	13
5種	11	4	5	1	21
4種	20	7	10	3	40
3種	20	22	15	0	57
2種	35	75	32	4	146
1種	32	21	35	6	94
合計	129	135	99	15	378

5.2. 収録辞典数から見た西周と初版以外の用語の特徴

収録辞典数の多い順に抽出語を見ていくと、定着度の高い重要語がよくわかるので、西周と初版用語の場合にならい、辞典収録数から所属語の分布を見てみよう。

表11では、収録辞典数が少なくなるにつれ、所属語数が多くなり、前述した「西周と初版の用語」（表6）の場合と大体同じような傾向を見せている。ただし、この種の用語では、収録辞典3種以上の語は、西周と初版の用語に比べて、語数がさらに低下している。これについて考えられるのは、一つには定着度が西周と初版の用語に及ばないことと、もう一つは出現時期が西周と初版の用語より遅いことである。

なお、先ほど西周と初版以外の用語に新造語が多いことを指摘したが、これに関連して、新造語では二字語に比べて三字語・四字語の増加がとくに顕著である点も特徴の一つとしてあげられる。次に、タイプ別に西周と初版以外の用語をとりあげるにあたって、各タイプの所属語を「二字語」「三字語」「四字・五字語」のように字数別に掲げ、この特徴を明確にしておく。

5.2.1. 「出典なし」タイプの語

このタイプの語は、古い漢籍に出典を持たないことを確認した上、続いて在華宣教師の漢訳洋書と英華字典、及び蘭学者の訳書と英和字典類でその用例の有無を調べる必要があるが、筆者の私見では明治以後の新造語が圧倒的に多い。前掲の表10をふまえて造語の時期を推測すると、『字彙』初版の刊行から明治末までの間に創出された確率が最も高いが、一部の語はやや遅く大正中期までに創出された可能性もある。ただし、それぞれの用語の初出例と造語者を特定するには、哲学辞典に先行する哲学著述などで確認しなければならない。

また、これらの語は日本で創出された後、中国に移入され現代中国語に定着している点も注目される。いつごろ、どんな経路で中国に伝わったかを解明することは今後の課題となる。

表12 収録辞典数から見た「出典なし」タイプの語（129語）

	二字語（77語）	三字語（21語）	四字・五字語（31語）
7種（6語）	啓示，綜合，対象，直観	多元論	人文主義
6種（5語）	質料，人格，体系，美学		不可知論
5種（11語）	幻覚，個性，神話，超人，動能	人生観，世界観， 排中律，無神論	形式主義，自然科学
4種（20語）	規定，具象，結論，実現，象徴， 制約，対比，聴覚，内容，類型， 聯想	汎神論，唯我論， 有神論，論理学	間接推理，写実主義，無政府 主義，利己主義，浪漫主義
3種（20語）	感官，客体，嗅覚，契機，錯覚， 思考，主語，周延，退化，内在， 判明，黙示，理念，類比	国際法，神経質	個人主義，実証主義，社会主 義，唯物史観
2種（35語）	快感，機動，系列，原型，構想， 視野，事象，色盲，述語，神権， 信条，素材，低能，動因，憧憬， 動向，透視，黙想，論点	下意識，失語症， 精神病，生態学， 先験論，相对論， 存在論	軍国主義，国際主義，条件反 射，神経衰弱，新陳代謝，相 互作用，相对性原理，帝国主 義，唯美主義
1種（32語）	映像，過敏，強制，極限，群体， 思潮，測定，体育，単位，知育， 提示，德育，悲劇，父系，偏差， 飽和，母系，理智，例証，論拠	遺伝学，優生学， 両分法	階級闘争説，官僚主義，原始 社会，上層建築，人文主義， 民主主義，無産階級，唯物主 義，唯物弁証法

「出典なし」タイプの二字語では、いまでも各専門分野の基本語として活躍する語が多く見られる。しかも、これらの二字語が語基となり、二次または三次結合によって長い複合語を造り出していることも多い。三字語では、全体的に「～論」「～学」「～法」「～観」などの接尾辞による造語が多いが、細かく見ると、例えば「汎神論」「唯我論」「先験論」「排中律」「優生学」「両分法」などのように、接尾辞と結合した成分が自立語基とはいえないものが見られる。このような三字語は、他の派生語よりも結合度が高く分解しにくいものとなっている。

四字語では、接尾辞「～主義」による造語がとくに目立っているが、これらも重要な概念語として定着度の高いものばかりである。一方、「自然科学」「間接推理」「条件反射」「神経衰弱」「新

陳代謝」「相互作用」「原始社会」「上層建築」などのように、二字語の複合で造られたものも多く見られる。五字語のほとんどは、「相対性+原理」「唯物+弁証法」「階級闘争+説」などのように、既成の二字・三字・四字語をベースに造られた複合語となる。

五字語以上の長大語になると、現代語での生存率がかなり低下することもある。今度の調査で対象から外したが、全体的に言えば、明治中期以後になると新出の二字語がしだいに減少し、これと引き換えに、三字・四字語及び四字以上語の増加がますます目立つようになった。

5.2.2. 『漢詞』未見」タイプの語

このタイプの語は、もし中国語との借用関係を考慮しなければ、前項の「出典なし」タイプと同一視してもよいが、「出典なし」タイプよりも収録辞典数の少ないほうに集中しており、しかも三字・四字語の比重が一段と拡大されているところからは、定着度が前項の語よりやや低く、所属語のほとんどが明治以後の新造語であろうと推測できる。また、このタイプの語は、中国出版の『漢語大詞典』(1994)に収録されていない点に基づいて分類されているとはいえ、次の諸語は、筆者の内省によって現代中国語では実際に使われていると判断できる。専門語はともかく、このうちの一般語については『漢語大詞典』の遺漏と見るべきであろう。

- 二字語 異化 関心 含有 幻聴 原点 公理 視角 想起 並存 盲点
- 三字語 愛国心 意識流 過渡期 擬人法 形態学 好奇心 省略法 大概念 特殊性
発生学 無意識 唯名論 歴史観
- 四字語 因果関係 応用科学 隔世遺伝 偶像崇拜 経験主義 現代主義 交感神経
自我実現 時代精神 神経系統 政教分離 精神分析 全称肯定 全称否定
単純概念 直接経験
- 五字語 自然弁証法 我思故我在

このような語については、日中間の借用関係があるかどうかを再検討して、借用関係が立証されたら「出典なし」タイプに移動すべきである。

表13の三字語では、「因果律」「形態学」「実証論」「内在性」「歴史観」のように、接辞による派
表13 収録辞典数から見た『漢詞』未見」タイプの語 (135語)

	二字語 (35語)	三字語 (39語)	四字・五字語 (61語)
6 種 (6 語)	公理, 他律, 統覚	無意識	教父哲学, 禁欲主義
5 種 (4 語)		因果律, 唯名論	感情移入, 第一性質
4 種 (7 語)	繫辞, 措定, 想起	動力因, 内在性, 歴史観	第二性質,
3 種 (22語)	基体, 止揚, 性向, 与件	愛国心, 一神教, 形相因, 形態学, 最高善, 実証論, 絶対我, 大概念, 特殊性, 有神教, 類同法	隔世遺伝, 自我実現, 時代精神, 純粹理性, 純正哲学, 神経系統, 単純概念
2 種 (75語)	圧覚, 異化, 仮現, 含有, 共感, 幻聴, 権化, 視角, 実存,	悪魔学, 因果説, 機会因, 擬人法, 好奇心, 至高善, 主知説, 省略法, 人格化,	因果関係, 確定命題, 記号論理学, 強迫観念, 近世哲学, 苦行主義, 経済史観, 形式論理学, 現代主義, 個

	捨象，種差，主辞，責務，想化，体欲，当為，賓辞，盲点，輿料，立証	審美学，道德律，独我論，媒概念，發生学，反定立，悲観説，複合法，平行論，楽観説	体観念，個別原理，交互作用，肯定判断，国家主義，自然崇拜，自然哲学，実存主義，実利主義，集合概念，人本主義，精神科学，精神分析，全称肯定，全称否定，抽象名辞，超自然主義，超自然的，直接経験，直接推理，定言的判断，反射作用，比較心理学，普通感觉，矛盾原理，両刀論法，我思故我在
1 種 (21語)	關心，原点，潜質，並存，本有	過渡期，異教徒，意識流	応用科学，下層建築，階級組織，空想主義，偶像崇拜，經驗主義，原始宗教，交感神經，構造主義，自然弁証法，政教分離，天賦人權論，労働階級

生的造語が圧倒的に多いが，これらの派生語は，特定概念を表すものとして結合度が相当高いので，「動力因」「機会因」「絶対我」「至高善」「媒概念」など自立語基による複合語と同一視して，語誌の記述を念頭にそれぞれの発生時期を突き止めるべきだと思う。

四字・五字語では，「個別＋原理」「全称＋否定」「形式＋論理学」「自然＋弁証法」のように，新出語とはいえ，既成の二字語が結合して構成されたものがほとんどである。そのため，これらの語の初出時期を求めるのに先立って，語基となる二字語の由来を明確にしておく必要があると思われる。

5.2.3. 「出典あり」と「新義あり」タイプの語

『漢語大詞典』では二字語以外の語で古い出典の示されるものがかなり少ないので，「出典あり」タイプの語は全部二字語となっている。西周と初版用語にある「漢籍に出典がある語」と比べれば，語数が明らかに減り，しかも収録辞典数の少ないほうに集中しているが，しかし「出典なし」と『漢詞』未見 2 タイプ中の二字語（計112語）と比較すれば，「出典あり」タイプの語（99語）は，それに匹敵する 5 割に近い勢力を持っている。つまり，西周と初版以外の用語において，三字・四字語では複合と派生による新造語が圧倒的に多数を占めるのに対して，二字語では漢籍に出典のある在来語は依然として半分近く用いられている。この点からも二字語創出（一次造語）の難しさがうかがえる。

「出典あり」タイプの語は，古代語の意味をそのまま受け継いだものと定義したが，在来語が訳

表14 収録辞典数から見た「出典あり」タイプの語（99語）

7 種（1 語）	判断
6 種（1 語）	自律
5 種（5 語）	形式，系統，仮説，知性，類推
4 種（10語）	暗示，意向，感情，醇化，情調，信念，生成，自我，前件，誤謬

3 種 (15語)	応化, 自省, 謬論, 対照, 知能, 定立, 特殊, 予想, 外圍, 観照, 制裁, 典型, 博愛, 迷信, 説明
2 種 (32語)	交感, 改造, 幻視, 考察, 実証, 対境, 内含, 因果, 環境, 広延, 公法, 総括, 判定, 悪魔, 運命, 憶見, 雑種, 止観, 実践, 準則, 静観, 調節, 適応, 天才, 独覚, 表情, 復活, 忘却, 融合, 構成, 啓蒙, 人倫
1 種 (35語)	願望, 複雑, 審美, 架空, 自信, 照応, 默契, 予算, 遺伝, 呼応, 真知, 団体, 偏向, 予期, 欲望, 輿論, 異常, 意図, 隔離, 期待, 教条, 手法, 触発, 創作, 評価, 物化, 変質, 変種, 変数, 忘我, 予備, 大我, 意味, 教養, 予見

語となって新しい概念を表した場合、何らかの意味変化が生じるのはむしろ当然のように思われる。この意味では、「出典あり」タイプと「新義あり」タイプの境界線は引きにくいものがある。考え方によっては、上掲の「出典あり」タイプから「新義あり」タイプに移動すべきものが指摘されるのかもしれない。筆者の調べでは、「新義あり」タイプの語は次の15語となっている。

仮象 過程 学語 激情 個人 興奮 史観 主体 小我 進程 推理 対話 特徴 反応
非我

このうち、例えば「個人」は、漢籍では「(特定の) その人」の意、また在華宣教師の英華字典では「一個人」の語形が見られたが、全体的には用例がかなり少なかった。明治以後の日本では、individual の訳語として「(団体に対して) 個々の人」の意に転用され、新義が生じたとされている¹⁷⁾。「興奮」は、漢籍では「身を挺して立ち上がること」の意であったが、同文館1912では心理学用語として「刺激されて感情が高ぶること」を表す現代義になっている。「推理」は、漢籍では「推測して整理する」の意であったが、朝永1905からは「既知の事実に基づいて未知の事を推し量る」の新義で各哲学辞典に登録されていた。

また、「主体」は、漢籍では「君主の体制」の意を表したが、明治以後の日本語では「事物の主要な部分 (本体)」の意となり、「客体」に対する語として一般化した。「反応」は、漢籍では「反乱に応じること」の意であったが、同文館1912では「刺激に応じて変化すること」のような新義が示されている。このほか、「小我」「非我」「対話」「進程」なども新義に転用されたものとして挙げられよう。

しかし、「新義あり」タイプと考えるのに適切ではないものは少数ながら存在する。例えば、「過程」は、漢籍では「度を過ぎる (超える) こと」の意で、ヲ格をとる補足関係のV+N構造であるが、日本語の「過程」は「経過する道程」を意味し、連体修飾関係のV+N構造となっている。両者は意味も語構成もずれている。「特徴」は、漢籍では「特別の徴収」の意に対して、日本語では「他と異なる特に目立った点」の意味を表している。語構成が一致するものの両者の意味では接点がまったく見出せないのが、借用関係があるとは考えにくい。このような語は、さきの4.2.2で触れたように、中日両国で別々に造られた語が偶然に語形が一致した「中日分立の語」として扱うべきであろう。ほかに、「仮象」「学語」「激情」「史観」などもこれに類似する。ただし、今回の調査では同類の語が少ない上、立証の根拠も不足しているため、とりあえず「新義あり」タイプの中に入れておいたが、いずれ再検討すべきものである。

6. 哲学用語の一般的特徴

本稿では、所定の基準に基づいて哲学辞典類から基本的な哲学用語を抽出し、「西周と『字彙』初版の用語」と「西周と『字彙』以外の用語」の二つの部類に分けて検討してきた。ここでは、これまでに述べた内容を踏まえ、この二部類の用語に関するデータを対照させることによって、明治大正期の哲学用語の一般的特徴を概観してみたいと思う。

表15 二部類の比較から見た哲学用語の特徴

辞典時期別から見た場合				収録辞典数から見た場合			
哲学辞典 と刊行年	西周と字 彙の用語	それ以外 の用語	初出語数 合計	用語収録 の辞典数	西周と字 彙の用語	それ以外 の用語	収録語数 合計
普及舎1885	120(23.9)	16(4.2)	136(15.4)	8種	6(1.2)	0	6(0.7)
朝永1905	129(25.6)	89(23.6)	218(24.7)	7種	32(6.4)	7(1.9)	39(4.4)
徳谷1905	106(21.1)	74(19.6)	180(20.4)	6種	39(7.8)	13(3.4)	52(5.9)
同文館1912	84(16.7)	106(28.0)	190(21.6)	5種	48(9.5)	21(5.6)	69(7.8)
宮本1922	42(8.3)	59(15.6)	101(11.5)	4種	71(14.1)	40(10.6)	111(12.6)
渡部1923	12(2.4)	14(3.7)	26(3.0)	3種	100(19.9)	57(15.1)	157(17.8)
高山1950	8(1.6)	16(4.2)	24(2.7)	2種	130(25.8)	146(38.6)	276(31.3)
村治1974	2(0.4)	4(1.1)	6(0.7)	1種	77(15.3)	94(24.8)	171(19.4)
類別合計	503(100)	378(100)	881(100)	類別合計	503(100)	378(100)	881(100)

＊表中、右欄の収録辞典数「1種」の数字は整理・削除を加えた後のものである。

表15では、まず「辞典時期別から見た場合」と「収録辞典数から見た場合」の二つの視点を設け、その下で、それぞれ「西周と『字彙』初版の用語」と「西周と『字彙』以外の用語」の二部類に分けて各項の数字を挙げている。() に示した百分率は部類ごと(縦方向)の比率を算出したものである。その結果に基づいて、次のようにまとめることができる。

(1) 辞典時期別(左欄)から見た哲学用語の特徴

「西周と『字彙』初版の用語」が普及舎1885の高い比率から昭和期の辞典に向けてしだいに低減していくのは特徴の一つである。これは、西周と初版の用語が近代哲学用語の草創期に早く登場し、しかも明治全期にわたって強い影響力を持っていたことを表している。これに対し、「西周と『字彙』以外の用語」は、普及舎1885のときに少なく、明治後期に大量に増え、同文館1912でピークに達して、大正期以後しだいに減少していくという曲線を描いている。つまり、西周と初版以外の新語は、明治中期頃にまだ大して増えなかったが、明治後期に急増し、同文館1912で西周と初版用語との比率が大差で逆転している。新語の増加が主流となったことの現れである。また、宮本1922で「西周と『字彙』以外の用語」がなお15.6%の比率を維持しているのは、新語の創出が大正後半期にまで及んでいることを示しているといえよう。

初出語合計の欄で見ると、朝永1905で初出語の数がピークに達したのは、それまでの時期(明

治20～30年代) はちょうど哲学用語の大量創出期に当たっていると考えられる。また、明治期4辞典の累計では哲学用語の82.1%がすでに収録済み、さらに大正期の2辞典を加えると、全用語の収録済み率は96.6%に達している。つまり、大正後期になると、哲学用語の創出はいよいよ終焉期を迎えることになったのである。

(2) 収録辞典数(右欄)から見た哲学用語の特徴

表15の右欄で収録語数の合計を見れば、二部類ともに8種の語が最も少なく、その比率が徐々に上がっていき、収録辞典数2種以下の語が最も多い結果となっている。8種の辞典を上下に二分して見ると、8種～5種の所属語は全用語の18.8%、4種～1種の所属語は全用語の81.2%を占めている。つまり、もし収録辞典数の多い用語を、定着度の高い哲学用語と見なすならば、その部分は2割足らずで、残りの用語は辞典によって相当の不一致が見られることになる。哲学用語の、修正を加えられながらしだいに統合され定着に向かっていく過程を考えると、これは納得できる結果である。

具体的に見れば、「西周と『字彙』以外の用語」は、とくに収録辞典数2種以下の欄に集中しているのがわかるが、これは、定着度が「西周と『字彙』初版の用語」より低いことと、明治末期と大正期の辞典に初出したものが比較的多いことと関係しているといえる。後者の理由については、例えば、表15の左欄で見ると、「西周と『字彙』以外の用語」が同文館1912ではじめて「西周と『字彙』初版の用語」と逆転し、その後ずっと多数を占めていたことで説明できる。

(3) 哲学用語における在来語と新造語の比率

各タイプの語において、「漢籍に出典がある語」を在来語とし、「漢籍に出典がない語」を新造語として大きく類別すれば、次のような結果になる。

表16 二部類における在来語と新造語の比率

	西周と初版の用語	それ以外の用語	出自合計
在来語	250 (49.7)	114 (30.2)	364 (41.3)
新造語	253 (50.3)	264 (69.8)	517 (58.7)
類別合計	503 (57.1)	378 (42.9)	881 (100)

つまり、「西周と『字彙』初版の用語」では、在来語と新造語がほぼ半分ずつの割合になっているのに対して、「西周と『字彙』以外の用語」では、在来語が約3割、新造語が約7割を占めている。抽出語全体から見れば、在来語と新造語の比率は大体4対6の割合になっている。これは、おおよそ明治・大正期の基本哲学用語の様相を反映していると思われる。ただし、今度の調査で対象としなかった5字以上の長大語や定着度の低い用語などは、ほとんど新造語の部類に属するものと見られるので、哲学用語の範囲を拡大していけば、新造語の比率がまた上がると推測される。

本稿では、近代哲学用語を概観し、研究の資料を提供するために、抽出した881語を各タイプに分けて全数掲げた上、下位分類に従って各タイプの語の性質を一通り検討してみた。これによって、ひとまず予定の目的が達成したかと思う。ただし、哲学用語中の「在来語」については、「新

義への転用」または「中日分立の語」が生じたかどうかを精査する必要があるし、「新出語」については、造語の時期と造語者の特定も課題として残されている。今後も引き続き近代哲学用語の成立に関する諸問題の解明に取り組んでいきたい。

注

- 1 清野 勉(1888), 井上哲次郎(1930)などを参照。
- 2 『哲学雑誌』各号の目次では、このような文章の三分類をしていないが、『哲学雑誌』第五百号記念号の附録として出版された『哲学雑誌総目録』(自明治二十年二月第一号至昭和三十年十月第五百号)では、各号の文章について三分類して整理しているので、これに従った。
- 3 井上哲次郎(1930)を参照。引用した内容は同文章の末尾に書かれた「附言」に出ている。原文の表記を適宜に現行の字体になおしたところがある。
- 4 朱 京偉(1997)を参照。
- 5 朱 京偉(2001b)を参照。
- 6 『哲学会雑誌』は、『哲学雑誌』創刊初期の名称で、明治25年6月から『哲学雑誌』に改称した。引用文には、筆者によって適当に句読点を付け、現行表記の字体に改めた箇所がある。
- 7 筆者作成の西周用語リストで用いられた11種の著述と採録された用語の異なり語数を示すと次のようになる。

百学連環(明3) 245語	哲学断片(明3~6) 106語	生性発蘊(明6) 220語
知説(明7) 43語	致知啓蒙(明7) 147語	百一新論(明7) 60語
教門論(明7) 26語	人生三宝説(明8) 77語	心理学(明11) 224語
論理新説(明17) 17語	心理説ノ一斑(明19) 7語	

ちなみに、近刊の真田治子(2002)では、付表として西周著作のルビ付き訳語と索引が添えられ、西周の訳語研究をいっそう便利にした。ただし、筆者自作の用語リストとは用語採録の方法において違いがあるのに留意されたい。
- 8 重複の語を異なり語に整理するにあたって、それぞれの語の初出辞典と収録辞典数がわかるように配慮した。例えば、「暗示」という語は、朝永1905、徳谷1905、同文館1912、宮本1922の4種の辞典に収録されているので、初出辞典は「朝永1905」とし、収録辞典数は「4種」と記しておいた。
- 9 ここでの分類は、主に朱京偉(2001a)の考え方に基づいているので、拙論を参照されたい。
- 10 本稿では、句および長い複合語を対象としない方針であるが、この「不容間位ノ法」はその後に現れた「不容間位法」の前身であったとの可能性が高く、しかものちに中国語に移入されたこともあるので、例外として採り入れた。このほか、次の(3)項にある「否定の否定」も同じ理由によって採り入れた。
- 11 表5の中で、収録辞典数1種の語は、抽出後、整理・削除を加えたため、もとの730語から現在の77語に絞られている。3.2を参照。
- 12 各部類の語の分類及び定義については朱京偉(2001a)を参照。
- 13 森岡健二(1991)p249を参照。
- 14 このほか、『講座日本語の語彙10・語誌Ⅱ』(明治書院, 1983)に掲載される「芸術」(平林文雄)の項を参照。
- 15 鈴木修次(1981)のⅡ、及び『講座日本語の語彙10・語誌Ⅰ』(明治書院, 1983)に掲載される「科

学」(高野繁男)の項を参照。

16 『字彙』初版の新造語などについては、朱京偉(1997)の3を参照。

17 柳父 章(1982)「個人」の項目を参照。

参考文献

- 清野 勉(1888)「哲学字彙編纂の事を論じ併せて世の言語改良家に告ぐ」『哲学会雑誌』第16号～第19号連載(明治21.5～8)
- 宮本 和吉(1912)「井上・元良・中島三博士共著『哲学字彙』」『哲学雑誌』第二十七卷, 第三百一号(明治45年3月発行)
- 井上 哲次郎(1930)「我邦に於ける哲学術語の起原(其一)」『哲学雑誌』第四十五卷, 第五百二十四号(昭和5年10月発行)
- 栗島 紀子(1966)「訳語の研究—西周を中心に—」, 東京女子大学『日本文学』第27号
- 森岡 健二(1969)『近代語の成立 明治期語彙編』明治書院(改訂版, 1991)
- 永嶋 大典(1970)『蘭和・英和辞書発達史』第5章, ゆまに書房
- 飛田 良文(1979)「『哲学字彙』について」『哲学字彙 訳語総索引』笠間書院
- 飛田 良文(1980)「『哲学字彙』の成立と改訂について」『英独仏和哲学字彙』名著普及会
- 鈴木 修次(1981)『日本漢語と中国—漢字文化圏の近代化—』(中公新書626)中央公論社
- 柳父 章(1982)『翻訳語成立事情』(岩波新書189)岩波書店
- 佐藤 亨(1992)「『百学連環』の訳語(句)の表記と語彙」『近代語の成立』桜楓社
- 朱 京偉(1997)「『哲学字彙』(初版)の訳語とその性質」『名古屋商科大学論集』41巻2号
- 手島 邦夫(1998a)「西周『百学連環』の訳語と幕末期英和辞書」『国語学研究』第37号
- 手島 邦夫(1998b)「西周訳『心理学』の訳語の位置—「百学連環」「英和字彙」などとの比較を通して—」, 日本文芸研究会『文芸研究』第146集
- 手島 邦夫(1999)「西周『致知啓蒙』の訳語—その形成過程と出自について—」, 日本文芸研究会『文芸研究』第147集
- 手島 邦夫(2000)「西周と『明六雑誌』の訳語」, 東北大学文学部『国語学研究』第39号
- 陳 力衛(2001)「『哲学字彙』における訳語の成立—著者の自筆稿本による第三版の改定・増補を中心に—」『和製漢語の形成とその展開』汲古書院
- 真田 治子(2001)「『哲学字彙』改版にあたっての訳語の変動」都留文科大学『国文学論考』3月号
- 朱 京偉(2001a)「中国の日本語研究・語彙」至文堂『国文学 解釈と鑑賞842』第66巻7号
- 朱 京偉(2001b)「『哲学字彙』再版と三版の増補訳語について」国立国語研究所『日本語科学』第10号
- 真田 治子(2002)『近代日本語における学術用語の成立と定着』絢文社

付 記

本稿は、国立国語研究所で開催した「日中近代学術用語の創出と伝播」研究会(2001.2.23)で口頭発表した内容をもとに、さらに展開・加筆したものである。招聘研究員として私を迎えて下さった国立国語研究所をはじめ、ご教示いただいた諸先生・諸先輩に心から謝意を申し上げます。

(投稿受理日：2001年11月27日)

朱 京偉 (しゅ きょうい)
北京外国語大学日語系
100089 中国北京市西三環北路2号
zhujwpost@163.net

The formation of modern philosophical terminology in the Meiji era: Research on philosophy dictionaries

ZHU Jingwei

Beijing Foreign Studies University

Keywords

historical lexicology, academic term, philosophical term, dictionary of philosophy

Abstract

This paper clarifies how modern philosophical terminology was established. The author chose 881 basic terms from 8 dictionaries of philosophy published since the Meiji era and classified them into 10 categories. The terms from each category can be divided into two groups: (1) Terms from the works by Nishi Amane (西周) and the dictionary, *Tetsugaku-jii* (『哲学字彙』), (2) Terms from the others. Tables display the source of each term.

The philosophical terms used in the work by Nishi Amane and *Tetsugaku-jii* appeared in early Meiji, and had great influence during the whole period. The other terms increased drastically in the latter part of Meiji, and reached their peak at the end of the era. Their use gradually decreased in the Taisho era. We can consider the formation of modern philosophical terminology to have been completed in this time. This research also revealed that the ratio of traditional to newly coined terms was about 4:6.